

2016/8/1

しろひげ@Kurobane です。

8月になりました。

四季の移ろいに、愛した人の不在を思い出すことがあります。

<時はめぐりまた夏がきて / あの日と同じ流れの岸 / 瀬音ゆかしき杜の都 /
あのひとはもういない> (青葉城恋唄から)

真夏は、命の気配を最も濃厚に感じる季節ではありますが、死者を強く想う季節でもあります。

盂蘭盆会という彼岸から戻ってくる先祖の魂を迎え、数日後にはまた送り出す、という古来から続く習俗をもつ日本の夏は、ことさら、その思いを私たちに迫ります。

今生きている私たちは、彼らの死後の世界を生きています。

しかし、いずれ自分も死後の時間の中に組み込まれるのですから、命を味わいながら死を想い祈る、特別な季節を持つ日本人はある意味幸せなのでしょう。

ところで、長野県の諏訪地方には「お静かなお盆でございます」という、あいさつを交わす習慣があるそうです。

新盆のない家(死者のなかった家)では、その年のお盆を生盆(いきぼん)と呼び、そのめでたさを祝うのです。

私にとっては、亡き人の魂を迎え、送りながら、彼らの生を記憶に刻み直す初めての夏になりました。

追悼と鎮魂の八月です。

炎天のもと、亡き人や平和のことなど、自ずから想うことの多い月ですが、夏をつなぎ留める新たな感慨や風物詩などをみつけたら、ぜひ教えて下さい。

黒羽根整形外科
黒羽根洋司